【報告要旨】

報告1

『リヴァイアサン』第4部から見るホッブズ宗教論――統治理論との関連から

古内潤一

本報告の目的は，トマス・ホッブズ著『リヴァイアサン Leviathan』における第4部「暗黒の王国」が単独に議論されている積極的な理由をホッブズの統治理論との関連において捉えることにある。『リヴァイアサン』研究の豊富さにも関わらず，第4部そのものに焦点を当てた研究は十分であるとは言い難い。このことは，『リヴァイアサン』宗教論を第3部，第4部と特定しつつも，その力点を第3部に置いていることに対応し，また第4部はホッブズの教会批判であるという一面的理解にも対応しているように思われる。

そこで報告者は，第4部に焦点を当てることにより次のことを明らかにしたい。先行研究においては，『リヴァイアサン』宗教論が，宗教という行為を内面に留めることにより宗教を無害化したという理解が一般的になっている。しかし，この解釈は内面的な様相が外面的な行為に移行する可能性を見逃しているのではないか。報告者は第4部で展開されている教会批判が主権者の統治法の制限も兼ねており，臣民がキリスト教の主権者であると判断する際のベンチマークとして機能している可能性を示してみたい。

主要参考文献

A. P. Martinich. *The Two Gods of Leviathan: Thomas Hobbes on Religion and Politics.* Cambridge, Cambridge University Press, 1992.

S. A. Lloyd. *Ideals as Interests in Hobbes's Leviathan: The Power of Mind over Matter,* Cambridge, Cambridge University Press, 1992.

鈴木朝生『主権・神法・自由　ホッブズ政治思想と17世紀イングランド』木鐸社，1994年。

梅田百合香『ホッブズ政治と宗教　『リヴァイアサン』再考』名古屋大学出版会，2005年。

報告2

ヒュームにおける probability について

渡辺一弘

本報告の目的は，ヒュームの probability 概念と，現代の私たちが日常的に用いている確率概念との異同という，これまでにもしばしば言及されてきた問題を，ヒュームの信念論全体にひろく照らして再検討することである。

プロバビリティに関する彼我の違いとは次のようなものである。たとえば，ある（歪んだ）コインを10回投げて，そのうち8回オモテが出たとする。このような実験の後であれば，私

たちはふつう，次にコインを投げてオモテが出る確率を，10分の8と考えるだろう。「コインを投げた全回数」に対する，「オモテが出た回数」の「比」を考え，そのような程度の信念をもつのである。しかしある解釈者によれば，ヒュームによるプロバビリティの議論をこの例に当てはめると，異なる結果が生じてくる。すなわちヒュームの場合，「オモテが出た回数」から「ウラが出た回数（オモテが出なかった回数）」を引いた「差」の大きさが，次の結果に対する私たちの意見を決定する。またべつの解釈者によれば，蓋然的判断についてのヒュームの理論は，経験の頻度だけでなく，経験の総数の「重み」をも勘案したものになっているという。

そもそもこうした違いが問題にされるべきなのは，ヒュームによる帰納や奇跡についての議論を，現代的な確率の概念と表記法によって，そしてそれらにもとづくベイズ主義の観点から，形式化して解釈することの妥当性に深く関わってくるからである。これまでの研究においても，ベイズ主義との適合性を軸に，ヒュームのプロバビリティ概念の修正解釈とその形式化がおこなわれてきた。しかしながらいずれの場合も，テキストとしては『人間本性論』1巻3部12節「複数原因にもとづく蓋然性について」が主たる対象であった。

そこで本報告では，そうした先行研究における解釈の論点と形式化を追いながら，それらをヒュームによる信念と判断形成についての一般的説明に照らして吟味することを試みる。

報告3

デフォーの政治経済思想——1698年から1704年にかけて

林　直樹

J. G. A. ポーコックは，ダニエル・デフォーを「コート（宮廷）」派の代表的論客と見なした。ポーコックによれば，1698年時点のデフォーと1730年代のウォルポール派は共にコートの思想系譜上に位置しており，したがってデフォーはきわめて早期にコートの言説を展開しえた先覚者ということになる。これに対し，H. T. ディキンスンはデフォーを「カントリ（地方）」派の論客として取り上げた。土地所有を権力の本源と見るデフォーはカントリの思想系譜に属しており，コートの腐敗を指弾する立場にあったと彼は言う。

本報告では，常備軍論争から*Review*創刊直後まで，すなわち1698年から1704年までの7年間におけるデフォーの思索の軌跡に焦点を当てることで，上のような見解の相違が生じた理由を明らかにしたい。そのことは同時に，コート対カントリのコンテクストとは別の流れにデフォーの思想的立場を据えることを意味するであろう。